（別紙　２）

論文審査の結果の要旨

氏　　名　　木谷　眞理子

本論文は、『源氏物語』の主人公光源氏を、『古今和歌集』が打ち立てた四季の秩序と抒情の様式を拠り所として虚無と混沌に抗する人間的な文化の英雄として捉えた、きわめて斬新な論考である。全１２章からなる本論は、大きく五つの篇に分かたれている。

第一編「或る世界観の成立」は、古代的な共同体が解体し去った後に、『古今和歌集』が、世界の本質的な虚無と混沌に対峙して規範的な四季の秩序と抒情の様式を樹立したことを論じ、四季の町からなる六条院を舞台として四季の情趣と融合して描かれる光源氏と玉鬘の恋に、古今集的な世界の具現を読み取る。論者はとくに、古今集的な四季を基に物語的要素も取り入れて当時盛んに制作された屏風絵に着目し、そうした屏風絵を鑑賞するさいに要求される、画中の一齣への感情移入と全体の俯瞰との往還運動が、『源氏物語』の語りの視点の移動にも生かされて物語世界に格段の深みを加えているのみならず、生と死のあわいにゆらめくような玉鬘との官能的な恋に陶酔しながらからくも自己を六条院の秩序の埒内に抑制する光源氏の、他界とこの世、日常と非日常とを往還する並はずれて大きく深い塊の振幅にも上記の往還運動が具現化されていることを論じている。

第二篇「第一部の世界」は、社会に組み込まれてある光源氏の内面に、現世超越と現世執着という相反する二つの志向が緊張的に孕まれている様相を析出し、「つれづれ」という人間存在の本然的なありようを見据え、その生の基底にふれあうような根源的な魂の共感による他者との関係を結んでゆくその独自な人間像を明らかにしている。一方、第三篇「物語を通観する」では、願望の終助詞「しがな」「もがな」と「ばや」との微妙な使い分けや、物語の食事の場面の描き方といった微視的な分析を通じて、夕霧や柏木ら光源氏の息子たちの世代の人物造形からは、光源氏の有していた上記のような魂の振幅の大きさ、豊かさが欠落していることを明らかにし、改めて光源氏の独自性を確認している。また第四編「源氏絵と源氏物語」は、国宝の源氏物語絵巻と俵屋宗達の源氏絵を分析したもので、それらが『源氏物語』の本質を深く理解した上で描かれたものであることを具体的に論じており、きわめて新見に富む。特に国宝光源氏絵巻の柏木と紫の上の死を描く二つの場面の比較分析は、前篇までの論旨とも深く照応して本論文中の白眉といえる。美術史の深い知識に裏づけられたすぐれた論である。最後の第五篇「或る世界観の終焉」は、『信貴山縁起絵巻』を取り上げ、第一篇で論じられたような古今集的世界観の終焉と中世的世界の幕開けを看取しようとした論である。

一部に、まだ充分精錬されていない憾みの残る箇所もないわけではないが、斬新な視点からの精緻な分析を通して、この物語が今日なお深い感銘を与えるゆえんを明らかにしえた点は高く評価しうる。よって、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。